



第1回 日時：令和7年10月16日（木）15：00～17：00
会場：足立区役所13階 大会議室AB
第2回 日時：令和7年10月30日（木）15：00～17：00
会場：足立区生涯学習センター4階 講堂
講師：白百合心理・社会福祉研修所 所長 青木 紀久代 氏

本研修では保育の中で身近に起こりえる事例を通して子どもの人権を尊重する保育を学びました。

子どもの4つの権利とは？

-  生きる権利
-  守られる権利
-  育つ権利
-  参加する権利

すべての子どもが心身ともに健康に育つために必要とされる権利だが……

現状は子どもをとりまく環境が侵害されている

- 虐待
- 施設に入所できない子どももいる
- 差別や偏見からは自由でなく、時々気付かないと可視化することが難しい

普段の保育を身近な事例を通して振り返る。
子どもをよく観察し、何を求めているか気づく力が重要

事例Ⅰ

事例について話し合いました。

保育園で外遊びから子どもたちを昼食に促す際の事例
切り替えられず、担任の指示をスルーし続けてしまうRちゃん。担任の「ご飯なくなっちゃうよ。」の声掛けに「いやだ!!」と喚き散らしたんだんエスカレートしていつてしまう。どうしたらいいの
か身動きが取れずにいた担任の傍らに信頼する主任が「**どうした、どうした**」と駆けつけた。
すぐに状況を察して、Rちゃんのバタバタに合わせて「ちょっと待っててー!」と代弁。「待ってるよー」と一人芝居しながら、しばらくRちゃんの傍にいてくれた。するとRちゃんはだんだん落ち着いて、最後は手をつないでクラスに戻ってくることができた。



Rちゃん

どうした
どうした

こういうことってよくあるよね。
でもまあ、待ってみようよ。
Rちゃんなりに調整中なのかもしれないから。



主任

受講生より



Rちゃんが落ち着くまで発言せずに見守り、落ち着くまで待つことが必要だと思った。



園全体で子どもたちをみていく姿勢が大切で、担任の声かけが子どもに伝わらない場面に気付いた時は、他の先生が入ることも大事だと思った。



主任はRちゃんの主体を守りつつ担任を助けている。子どもの権利を守るために担任を助けている。



主任はRちゃんの行動を「こうしなさい」と言ってない。Rちゃんは自分自身で自分の行動を変えたことが分かった。

主任がRちゃんの調整中の心を認めることで気持ちの代弁をしている。

➡子どもの気持ちを代弁する声掛けは、必ずしも行動を変えようとする声掛けではない。
行動を選択して変えているのは、子ども自身である。



事例2

悲しいときに求められる先生の事例

A先生は、主任クラスのキャリアがあるが、長年フリーの保育士としての役割を自ら希望して担っている。今年は、一人担任の4歳児クラスに多めに入ってくれている。陽気で優しい先生で子どもたちに人気がある。特に機嫌を損ねて集団に入れない子どもたちにとってA先生は、絶対的な救世主である。4歳児クラスでの外遊び時、Kちゃんは、砂場でトンネルを作ろうと砂場に飛び込んだ。ところがみんなは、砂のケーキを囲んで楽しんでいる真っ最中。Kちゃんはあつという間に追い出されてしまった「もーやだ!!」とKちゃんはぶち切れて、園庭にある丸太の長いベンチに走っていき、みんなに背を向けて、肩を吊り上げて怒りのオーラを放っていた。そのうち、ふっと背中が丸まって、足を時折ぶらぶらさせながら、うずくまるようになっていった。Kちゃんの怒りが寂しさになるタイミングをA先生は、見逃さず、丸太のベンチに並んで腰かけている。寂しさや悲しさをすつと感じ取り、寄り添い、ケアしているのだった。



4歳児クラス担任

A先生

子どもが助けを求める 同僚(A先生)から学ぼう



- ・子ども一人一人の様子をよく観察する
- ・他者の痛みにも共感できる資質を持つ
- ・子どもの気持ちを汲み取り寄り添う
- ・子どもの人権を守る環境を作るため、心に余裕を持つ

まとめ

日頃からの省察が重要

- 大人(保護者、保育者)の利益が満たされ、子どもの利益が軽視されている状況が優先されていないか
- 子どもを一人の人として尊重し、人間の尊厳を重んじる心や行為をおろそかにしていないか

保育を振り返り、考え続ける

同僚と対話し、何でも話せる関係を築く

多様な視点を持つ



研修生の
報告書より

第1回目

子どもとの関わりの中で意識しながら対応しているつもりではあったが、第三者から具体的な事例を聞くことで細かく深く考える必要があると感じた。自身が更に意識して子どもと関わっていくことと、一緒に働いている職員にも伝えて保育の質の向上に繋げていきたい。また乳幼児リーダーや上司にも子どもの様子等の相談を行い園全体で、支えあっていきたい。

保育園ではそのつもりがなくても「参加する権利」を侵害していることが多いと改めて思った。声掛け一つでも子どもにとっては大切なことで、特に「～しないと～できないよ」は子どもの自尊心を傷つける声掛けだと学んだ。「これってどうかな?この声掛けはどうなんだろう?」等、その都度振り返りをしていきたい。そしてその振り返りで出たことを全員で共有し、常に子どもの人権を意識して保育を行なっていきたい。

第2回目

日々子どもへの関わり方が、子どもの権利(生きる権利、守られる権利、育つ権利、参加する権利)を侵害していないか、子どもの育ちを保障しているかと振り返り、子どもとの関わり方や子どもの行動の味を考えること、保育者間での対話を通し、自分と違う視点に気付くことで、保育の幅を広げることができると学び直した。

子どもの言葉やしぐさ、行動から、子どもの気持ちを汲み取って寄り添い、共感したり、代弁したりして受け止め、橋渡しをしていく。若手職員の子どもの関わりを見守りつつ、困っている場面では「どうしたどうした」と手助けをしていきたい。職員間の話しやすい雰囲気づくり、傾聴と対話を大切に、職員間の連携を図れるよう努めていく。